

特集によせて

(法政大学) 趙 宏偉

今日、中国は世界の外交舞台における“主役”の一つと言えるまでの座に上り詰めた。改革開放が始まる1978年から今日に至るプロセスにおいて、日中関係は「蜜月期」、「平淡期」、「険悪期」等を辿ったが、他ならぬ日本外交自身は現在、一大転換期に差し掛かっているとも言える。本特集は、今日に至る日中関係のプロセスを考察し、それを動かしてきたメカニズムを探求し、そして日中関係の行方を展望するものである。

本特集は上述した問題意識を共有する3本の論文からなる。

益尾論文は日中関係のいわゆる「蜜月期」を対象とし、この時期の始まりの1978年に焦点を当て、改革開放を始める中国と日中関係について分析を行った。

三船論文は反対に、小泉政権が発足した2001年以降の日中関係の「険悪期」を中心に分析を展開し、富強大国化する中国と日中関係について考察を行った。

趙論文は1990年代からほぼ20年間、アセアンを軸に進められてきた東アジア地域統合に関わる日中関係を検証し、日中それぞれの外交スタイルを析出した。

本特集は、6月ごろから企画しはじめたものであるが、3本の論文の執筆者は、近年それぞれ日中関係、中国外交を研究課題とする日本学術振興会科学研究費の代表として研究を重ねてきて、その研究成果の一部を本特集という形で学界に示したものである。なお、3人の執筆者は原稿を書き上げた段階、10月に「特別分科会」という形で、アジア政経学会年度大会にて発表を行い、広く学会員から批評をいただいた上、原稿に推敲を重ねた。コメントや資料提供等を頂いた多くの会員方々、とりわけ岩下明裕、高木誠一郎、田島俊雄、菱田雅晴、諸会員に感謝を申し上げます。

昨今の日中関係研究は、政治研究者や評論家等によるものは多く見られるが、日中関係の専門家による研究は少ない。益尾と三船は今に数少ない日中関係、中国外交の研究のプロパーである。本特集はこうした学界の現状を意識して組まれたものでもあり、日中関係の研究の促進に多少でも役に立てば幸いである。

2009年秋、本特集の完成段階に、日本の政治、日本の内外政策は、自民党から民主党への政権交代に伴って「革命的」と言えるほどの大転換の段階に入った。大転換の段階は不確実な段階とも言い換えられる。ただでも外れが多いと言われる「行方の展望」は、大転換の最中の今日においてはほぼ不可能であろう。とりわけ、趙論文が析出した日本の外交スタイルたるものは、今日の大転換の中ですべて棄てられる可能性まで出てきており、日本外交は斬新な姿を現してくるかもしれない。研究者として今後、遅れをとらずに大転換中の日本外交を追っていきたい。